HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	商品価値の「実体主義的規定」と「関係主義的規定」によせて
Author(s)	荒又, 重雄
Citation	經濟學研究, 35(4), 165-173
Issue Date	1986-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31733
Type	departmental bulletin paper
File Information	35(4)_P165-173.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 35-4
北海道大学 1986. 3

＜研究ノート＞

商品価値の「実体主義的規定」と「関係主義的規定」によせて

荒 又 重 雄

70年代に入って以降のわが国マルクス学の動向に，実はわたくしは広い知識をもち合せてはいない。しかし，わたくし自身も，戦前水準の研究の封印解除からはじまって60年代にいたる先学の研究に学びながら，何がしかの前進のための試論を発表してきているのだが，そのわたくしの立場からみて，70年代以降のわが国マルクス学動向には，若干の異和感をおこさせるものがままあるのである。主としてここで念頭にあるのは，経済学の基礎理論としての商品価値概念をめぐる論議なのであるが，残念ながら全面的にリサーチする余裕がわたくしにはない。そこで，たまたま身近かの若手研究者に紹介してもらった有江大介氏の論文「価値ノミナリズムとマルクス」(『土地制度史学』第103号) を手がかりにして，いわば，問題設定については有江氏と共通の地平に立っている人々に対して，わたくしが理解している問題設定を卒直に提示してみる，ということをこの研究ノートで試みてみたい。したがって，本稿は，有江氏の論文に対する感想は含むことになるが，決してその基本論旨への批判ではない。

まず，最も重要と思われる手がかりを示すことからはじめる。有江氏は標題にある価値ノミナリズムを価値リアリズムと対置させて用いている。これをより精密に言いかえれば，価値の「関係主義的規定」と「実体主義的規定」の対置となるようである。この二つの規定の特徴は何か。引用してみる。

「価値とは労働主体から労働能力があたかもエネルギーのように流出し，商品の中に実在的に凝固したもの，という徹頭徹尾実体主義的な把握」(46頁左段)。

「価値なるものが予め個々の物の中に実在するのではなく，商品－貨幣関係の内に物が投げこまれたとき，初めて物が対象的な価値性格をうけとる，ということである。この価値を社会的な関係概念として把える把握」(46頁右段)。

この二様の把握をどう扱うか，一方を捨てるか，何らかの統合を考えるか。そこにはもろもろの立場と，その諸立場の論争があるようにみうけられる。有江氏は，「極端な実体主義や極端な関係主義からの把握は，一面的なものにならざるをえない」とみて，「現実の対象，そして経済学の対象とは，事的な世界であると同時にまた物的な世界でもあるから」，「本来的に二義的性格のものと把えるべきであろう」(49頁右段――50頁)，と結論しているが，その説得性がどうであるかもわたくしはここでは問わない。ともあれ，有江氏によって提示された二様の把握という舞台設営自体についてみると，近年のマルクス学の動向の中である程度広い合意があるものと推定して進むことにしたい。丁度，有江氏の言葉の中に物的，事的という区別もあらわれたので，このそれぞれを実体主義的――物的，関係主義的――事的と振りあてておくこと

にしよう。

マルクス自身の中に，二様の把握，二種の規定という理解を許す多様な叙述があり，『資本論』第1巻第1章の第1節，第2節はどちらかといえば「実体主義的把握」にかたむき，第3節，第4節はどちらかといえば「関係主義的把握」にかたむいている（47頁右段参照）というのも広く共通する理解とみられる。

早速，この点からわたくし自身の理解をのべることにする。まず冒頭の四つの節でマルクスによってなされた論理的展開を，わたくしは次のように理解している。第1節は，交換価値を所与のものとしてうけ入れ，これから商品価値という本質に下向する部分，第2節は，商品価値という形態をより一般的な抽象的人間労働によって基礎づける部分，第3節は商品価値が交換価値という形態をとらざるを得ぬことを上向で示す部分，第4節は抽象的人間労働が商品価値という形態をとらざるを得ぬ必然性を上向で示す部分，である。下向，下向，上向，上向。この四つの論理過程で交換価値，商品価値，および抽象的人間労働が結びつけられている。そのようにわたくしは考えている。

いま少し説明してみよう。まず，所与のものとしての交換価値とは，古典派経済学のいう交換能力であり，だれでも知っていることである。商品をもっていれば，それをそのものとして使わなくても，他のものを交換で手に入れるためにも用いうる。アリストテレス以来，いわれてきたことである。マルクスはそこから出発して，いわゆる「蒸留法」をもって，交換価値の本体は実は抽象的人間労働の凝固物としての商品価値であることを示す。次いでマルクスは，商品価値として凝固している抽象的人間労働とは，社会的総労働の一分肢としての労働すなわち社会的労働であることを示す。ひるがえってマルクスは，なぜ商品価値が，そのものとしては現われないで，交換価値とりわけ貨幣の姿をとった一般的な交換能力として現われざるを得ないかを示し，さらに社会的労働の一分肢であるということが，なぜ商品価値という形態をとってしか現象しえないのかを，商品を生産している労働の社会的性格よりして明らかにしたのである。

わたくしからみれば，第1節，第2節と第3節，第4節のニュウアンスの相違は，そこで何を明らかにすべきか，という課題のちがいに，少くとも，主としては由来するのである。

いまここに述べたわたくしの理解の基本構造からすると，有江氏によって対置されている「実体主義的な把握」も，「関係主義的な把握」も，その対置も含めて，実は理解し難いのである。そこでは，「価値なるものが予め個々の物の中に実在する」のか，それとも「商品－貨幣関係の内に物が投げこまれたとき，初めて物が価値性格をうけとる」のか，と対置されている。そこでは，物と関係が最初から切りはなされている。ここで，物と関係とが違うことをさしあたり指示していることも，それが論理の次元として別であることもみとめた上で，しかし，わたくしは問題の設定をそのようには理解していないのである。ここでの物は商品なのであるから，物は予めどこかにあるものが関係の中に投げこまれるのではないのであって，物は関係の中ではじめて生成しているのである。つまり商品として生産されているのである。ついで，関係はここでは物と物との関係としてのみ現実のものなのであり，つまり商品関係として社会は生きているのである。こうした物と関係とを別々に切りはなすのは，分析の過程では不可避であるとしても，切りはなして相互に孤立化させ化石化するのは正しい方法とは思えない。

たしかに，第一節，第二節の分析は，どちらかというと個々の商品や商品価値を，ein Ware を，分析の対象としているかにみえるところがあり，これに対して第三節と第四節は，商品をとりわけ関係の中にもちこんで分析しているところに特徴があるかにもみえる。しかし，第一節で分析している商品は，もともと，資本制的富の現象としての商品集成，つまり決して

単に個々の商品ではない，尨大な商品集成の中から，任意に抜き出された商品なのであって，背景が忘れられることはない。商品世界全体とは別に，あるいはその外で，偶然的に何らかの財貨がとりあげられたのではないのである。また第三節で分析される商品も，決して諸商品の交換比率という関係の問題としてのみあったのではなく，むしろ，相対的価値形態の地位にある商品の価値がどのように等価形態にある商品にうつし出されてくるかが，鏡にうつる姿，さらには，価値がとる現実的な形態として分析されているのである。

尨大な商品集成の一構成要素としての個々の商品という意味の Elemental Form が，たとえば原基形態といったやや神秘的な訳語をつけられたことから，冒頭商品の概念の中に何か神秘的な自己展開力があるかのような想いを広くひきおこされたのは，わたくしの考えではあまり好ましいことではなかったのであって，マルクスが試みた分析は，むしろ常識の中で神秘的な，商品に内在する交換力能を，ヴェールをとりさってその真実の，平明な姿のままにみせようとすることなのである。平明な姿とわたくしがいうのは，ある範囲の人間たちの集りである社会が，その組織形態がどうであろうと，いずれにせよ展開してきたこと，その社会の総労働力がその社会に必要な財貨を自ら生み出して，消費しているという姿である。商品に内在する交換力能ということの裏にはその平明な事実があり，この平明な事実の商品社会的な特殊なあらわれが，商品そのものに内在する交換力能だ，ということである。もちろん，そこで終れば，かなりの程度に古典派に先祖返りをするのであって，マルクスは，追いかけ，ではなぜそのような特殊なあらわれをするのか，と問題を立て，それに答えるわけであるが。

であるから，「実体主義的把握」にかたむいているかにみえる第一節であっても，例の「蒸留法」による交換価値の本体の追求にあっては，最初から二商品の関係をとり出して，これを分析しているのであって，尨大な商品集成が，相互に外在的な個別の商品の偶然的集成ではなく，その商品集成の内に関係を含んだ，必然的な集成としてあることを想定し，最も単純な要素ではあるが，すでに関係を含んだものとして分析しているのである。使用価値としては区別され，交換価値としては共通するその対置のうちに，関係はあらわれ出ており，共通するものとしての抽象的人間労働は，関係をなり立たせている地盤，両項の同一性を示しているのである。

第二節では，抽象的人間労働はさらに「生理学的意味での人間労働力の支出」に還元され，そこでますます「実体主義的規定」そのものに帰結しているようにもみえるかも知れない。しかし，わたくしはそのようには理解していない。以下のごとくである。

商品に属する使用価値と交換価値という規定の奥には，具体的有用労働と抽象的人間労働という規定がかくされていることがわかった。労働のこの二重性は，実は社会的労働の二重性である。一つの社会は，その総労働を自らのものとしているからこそ一つの社会なのであり，その総労働の部分部分にそれぞれ異なった役割を負わせているが故に一つの社会なのである。個々の労働力の側からいえば，その労働力が一つの社会の要素であるということは，その個別労働力が全体としての総労働力に一体化しているということ，あるいは同質化しているということであり，同時に特定の役割を果しているということである。抽象的人間労働とは，もろもろの社会的分業の諸分肢を生み出す共通の基盤であり，具体的有用労働とはそのもろもろの社会的分業の諸分肢そのものを示すのである。第二節がのべていることの中核は，わたくしの理解によればまさにこのこと，社会的総労働力と，その社会的分業における諸分肢とを抽象的人間労働と具体的有用労働の概念の基礎として示すこと，なのである。

もろもろの社会的分業の諸分肢をなり立たせ

る共通の地盤は何か。分業，よりこまごまと述べたてれば，職業，職務，地位，身分，門地等々，の区分をなり立たせる共通の地盤は何か。マルクスはこの問に実在的に答えようとするわけである。社会的人間からそうした分業に帰着するもろもろの規定性をはぎとっていくと，生身のからだがのこるだけであって，しかも，その時々の役割を捨象された生物としての人間の姿がのこるだけである。だから，抽象的人間労働とは生理学的意味での人間労働力の支出である，という規定が生み出されることになる。

だが，わたくしは次の点を強調したい。抽象的人間労働は生理学的意味での人間労働力の支出であったとしても，逆また真ならず。生理学的意味での人間労働の支出がすべて抽象的人間労働として意義をもつのではない。生理学的意味で無差別な人間的労働という規定は，あくまでも社会的労働の規定性なのであって，その社会をこえ出たところ，無関係な諸社会の間，その社会と相互に外在的な何か他のものとの間では生理学的無差別性はいみをもたないのである。もともと，ただ生理学的エネルギーといえば，人間だけを他の哺乳類から区別することは難しいし，また人間ということで広くとれば，地球の端と端で相互に没交渉でくらしている社会間でも共通性をいわなくてはならなくなる。偶然に出会って相互に絶滅戦をおこなう社会間にも生理的エネルギーは共通してしまう。そういう点にまで抽象的人間労働を拡大するわけにはゆかないのである。あくまでも一社会の内部のことである。商品世界の場合には，その領域が弾力的であることもみなくてはならない。しかし，だからこそ，人々が出会って，ただにらみ合っているのみでなく，現実に商品交換を行なったとき，そこに商品世界が，つまり一つの社会が成立つ，ということが注目されるのである。しかも，これは，商品世界のいわば発生期の，あるいは拡大する周辺での問題である。

抽象的人間労働の量的規定性としての社会的平均労働，社会的必要労働時間も，社会的に正常な生産条件，労働の熟練および強度の社会的平均度といった規定に結びついている。これは，わたくしの理解によれば，社会的総労働力の利用と配分の問題であって，個々の労働力やその支出は，総労働力の一分肢としてのみ評価されているということなのである。もちろん，ここから価値生産と価値実現の問題にもからむ社会的必要労働論争が生れ出る必然性，さらにはその必要性をもみとめた上で，なおわたくしが言いたいことは，ここでは決してデボーリン的な生理的エネルギーが出発点とされているのではなく，むしろ，そうしたものをも要素として取りこむような，社会的総労働力の利用と配分が出発点なのである。個々の要素の集成が平均をつくり出すのではなく，全体の示すものの個々の要素への配分が，平均にもとづく評価ということになるのである。

もともと関連の中に置かれていた個々の要素を，関連からひきはなし，孤立的に分析するにあたって，当初の関連を忘れさって，そもそもそれが孤立してあったかに取扱ってしまうところから，いうところの「実体主義的な把握」が生れてくるように，わたくしには思える。生理的意味での労働力の支出とは，そのように社会的な規定が除去された姿として意味づけられてはならないのであって，社会的総労働力の利用と配分の観点に立ったとき，その総労働力はまさに全体を貫ぬく共通性としての生理的な意味での力，その発現可能性，として扱われるはづだというように意味づけられなくてはならない。社会的総労働力といういみでは，まさにそれは実体的な規定であるといってよいが，それが分肢としての個々の労働力に配分され，その個々の労働力が対立しあう総労働力の内部構造，より正確にいえば，その個々の労働力の支出が相互に取り結ぶ社会の内部の諸関係の次元でいえば，それは同時に関係規定なのだといわなくてはならない。

次に，「関係主義的把握」の側についてみよう。有江氏は，「関係主義的把握」に特徴的な見

方を次のように説明してくれている。「生産過程から相対的に自立した商品と商品との社会関係の中において価値概念は生成するという，関係規定的な把握……」，そしてそうであるかぎり，「商品価値は直接的生産過程における労働と内的連関をもつことはない」（前掲論文，47頁右段――78頁左段）。

これはとても卒直な言明であって，わたくしとしては大変とりつきやすい。ここには，生産関係から自立した商品関係と，商品関係からきりはなされた直接的生産過程とが表象されていると思われるからである。わたくしの理解によれば，マルクスが商品関係を捨象して直接的生産過程を分析するときも，資本制商品，資本の運動の内部で生産される商品，の生産過程を分析するなかで，そこからのさらに一段基層の分析としてそれをなしているのである。また，生産過程を有機的に取りこんだ全体としての商品関係をつねに問題にしているのであって，生産関係に外在的な，偶然的な，あるいは表層としての，商品関係を問題にしているのではない。社会関係を，その一社会の生きた全体を念頭において吟味しようとすれば，社会を活動しているものとして，Tätigkeit の次元でみなくてはならないのであって，社会を活動の次元で吟味するときに，まずその中での物的生産活動に注目するのは全くありうべきことであろう。消費はかなりの程度個別的でありうるが，生産は社会的性格が強いのが普通であろう。もちろん，生産よりも消費の次元で人間活動の社会的性格が強くあらわれる場合のありうることを，わたくしはあえて否定しないが，ここでの生産活動の示すものの中には，ある特定の形での社会的分業，まさに総労働の社会的分割のあり方，をも含めてわたくしが概念していることは言いそえておきたい。

そんなわけで，生産関係からきりはなされた商品関係をいうことは，まちがった過度の抽象であるとわたくしは考える。わたくしの理解する『資本論』第1篇は決して流通論ではなく，商品論（生産も交換も含んだそれ）であって，第2篇以下につづくものは資本制的商品の生産論なのである。商品関係は，少くとも，その中心部分では，社会的分業のあり方の一つなのであるし，社会的分業とは，社会的総労働力の支出の社会的分割のあり方，つまり労働の編成，生産の編成であるのに，どうして，生産から自立した，これから切りはなされた，商品関係をそのように概念するのであろうか。もちろん，そうした概念のしかたにつながるもろもろの理解があることをわたくしとて知らないわけではない。わたくしとしては，わたくしのような理解の仕方もあることを知ってもらいたい。

実体と形態，あるいは実体と関係とを対置する理解に対して，わたくしは分析における次のような重層性を指摘しておきたい。すなわち，使用価値一般，他人のための使用価値，交換価値の担い手としての使用価値という重層性である。第1は抽象的生産一般に，第2は社会的分業のもとでの生産に，第3は商品生産に対応する。つまり商品生産は第1と第2の層を自らのうちに含みながらあるのである。わたくしは，通常あまり注目されているとは言えない第2の層の重要性を強調したいのである。そこに注目することによって，資本制生産の分析で確立した経済学を，その他の社会的生産の分析の手段として拡張してゆく手がかりが与えられるからである。ブハーリンのように，商品生産と，商品生産の外皮をはぎとった生産一般との区分だけですすむのでは，その他の社会についての経済学は不用になってしまうのであり，また，何らかの拡張の手がかりをつかめなくては，商品の概念から経済財の概念へとしりぞきながら，あたらしく上向の試みをつづけている新古典派経済学の研究に水をあけられるままとなろう。念のために言えば，経済財の概念は第3の層よりは第2の，さらには第1の層に近い。これに対して完全競争の条件は，第3の層よりも一層特殊，具体的である。

この三つの層は，他の場所でも発見できる。

種々の使用価値を人々が利用している最も基層の次元の上に，社会的物質代謝あるいは社会的質料変換と訳のつけられている次元，すなわち社会的分業によって様々な人々の手もとで産出された使用価値が，それを消費する人々の手に移ってゆく，しばしば交換を含む流れの次元があり，これの特殊商品経済的な形態としての商品流通という第3の次元がある。

この見方をつぎのように押し拡めてゆくことは可能である。労働一般がある。これは人間と自然との間の物質代謝の一つとしてのそれである。この上に第2の層をみとめうる。社会的分業の中でとりわけて個別化，孤立化するあり方もあれば，協業や，分業を含む協業へと結合するあり方もあるといった，社会的労働のあり方である。その上に第3の層がある。資本制生産としては，商品生産の主体としての個別的資本によって，そのうちに内包された協業と分業であり，個別資本が相互に対立している限りで相互に孤立している労働である。

人間社会が，土地と過去の労働の集積としての労働手段や労働対象を利用するあり方の分野でも，次のように言える。人間が労働手段をもって労働対象や土地に働きかけるのは生産一般の規定である。その人間達が社会をつくり，土地や労働対象や労働手段が広いいみでその人間社会に属しているものとみたとき，第2の次元があらわれる。社会はどのように土地や労働対象や労働手段を社会的労働の諸分野に配分活用するのであるか，と。このことの社会的標準や，それを達成するメカニズムは，いずれにしろ何かあるにちがいない。その特殊資本制的あらわれとして，標準達成を強いる普遍性をもった利子率や，自然的生産性の差を吸いとって標準達成を強いる地代やがあらわれる。これは第3の次元である，と。

「関係主義的把握」といわれるものをみていると，わたくしのいう第2の次元に近い把握がみられるように思われる一方で，第3の次元に固有な問題が軽視されてきているようにわたくしには思われる。というのは，物 Ding と事 Sache を区別し，後者を重視するあまり，前者を不当に軽視しているように思われるからである。人間の社会的諸関係は第2の次元においても言われうることであり，商品世界において固有なのは，それが諸商品の諸関係として現われること，人間と人間との間の諸関係が物と物との間の関係として現われることであるのに，物の形態が，幻想としてのそれが否定されるのはよいとして，現実的形態としても軽視されることになっているように思われるからである。

商品の物神性が成立していないような世界にも，別な物神が社会的諸関係から析出し，諸関係の物神化をすすめていたことがあった。そもそも物神崇拝なる概念は，宗教批判や批判的な宗教研究から生み出されてきたものである。商品物神を克服しようとして，あたらしく物神としての政治思想の出現を許してしまった今世紀の現実をわたくしも知っている。商品経済自身が，その高度な発展のうちから，物としての商品をのりこえるかにみえる人間たちの経済諸組織つまり諸関係を生み出してきている現実もある。かつて中世的搾取のあり方たる地代も，当初は直接的暴力によって支えられていたものが，後代には諸関係の力で支えられた，といわれていることなどもある。商品物神をはずしてもなおあらわれうる疎外された諸関係，人間たちを生かすべく編成されてくる社会関係を，自分自身を抑圧するものへと変成させてしまう人間達自身の活動，そうしたことどもへの注目は，まさしく現代的課題であろうことをわたくしは否定しない。

しかし，である。世界貨幣が最終的に金から自由になる姿をだとか，社会的総生産物の分割分への社会構成員の権利が，商品経済を前提にしながら，物としての商品を離れたところで，社会的な組織自体によって，安定的に確保されえている姿だとかを想定することは，あまりにお人好しにすぎるのではなかろうか。それぞれの時点で社会的生産における応分の役割を果す

ことから離れたものたちの権利が，公的年金受給権にしろ，中央銀行に自ら与えた信用（金ではなく銀行券をうけとったという意味で）を，再度いずれかの金融機関に与えるという形で（預金するという意味）積み立てている貯蓄にしろ，どんなに心細いものであるかは広く感じられていることではあるまいか。

物が関係の外でつくられているかにとらえる表象，「実体主義的把握」に対して，わたくしは先に，物が関係の中でつくられているという表象を対置した。ここでは，関係の内に物が投げこまれるという表象，「関係主義的把握」に対して，物によって関係がつくられるという表象を対置したい。

わたくしの理解するところでは，商品経済とは，商品交換がある程度安定的に展開していることを前提として，こんどはそれをあてこんで生産が行なわれているような経済のことである。商品交換とは，商品に即して個別的にみれば商品の姿態変換の過程であり，全体としては個々の商品の姿態変換過程が相互に絡み合った商品流通である。そしてそして商品流通とは，社会的生産物の社会的質料変換つまり生産物がつくられたところから使用されているところに交叉的に動いていく過程の一つの特殊社会的なあり方なのである。

そのようなものとしての商品交換の独自性は，交換の両当事者，むかいあった商品生産者が，互に商品所有者という規定以外のものは含まずに対じするということである。つまり，提示された商品の質と量だけが問題であって，商品所有者たちが個々にもっているそれぞれのその他もろもろの社会的規定性は捨象されるということである。実際には，売り手と買い手との関係には，それぞれのもつ社会的規定性が影響する。男であるか女であるか，身分が高いか低いか，どこの地域の生れであるか，どんな職業か，等々。しかし，商品交換は，そのようなもろもろの規定を無視しうるほどに小さい位置に閉じこめるか，あるいは商品所有者という規定に従属するものにかえてしまうのである。誰が作ったものでもかまわない，誰に使われてもかまわない，ということ，生産者が誰であっても，消費者がだれであってもかまわない，ということ，ただひたすら，交換における平和な合意だけが問題であるということ，これが商品交換の独自性である。

商品交換の両当事者の間には，事前には何の関係もない。あるとすれば同じ市場に足をむけるというだけ。互に商品を交換することで，そこで関係が成立する。その関係はあとには残らない。これが中心である。もちろん，この言い方は多少極端であって，両当事者が市場にむかうさいには，すでにその同じ市場にむかうということの中に社会的連関はあらわれているとも言えるし，交換がなり立ったあとには，両当事者は互に相手を全く見知らぬものとはしない経験を得，かつ市場で合意がなり立ったことの記憶をのこすことになろう。しかし，それは，次に他の相手と交換関係に入ることをさまたげるものではない。むしろ，交換の相手がだれであろうと，自分の商品と引き換えに相手の商品を手中にしたその瞬間に，そののちに暴力が介在しないかぎりは，それぞれの労働の成果は互に相手方の手中に入り，相手方の労働の成果はそれぞれの手中に入り，つまり，古典派的に言えば，相手の労働への支配は確立したことになる，ということが眼目なのである。労働の成果はすでに物の形をとって当の労働力支出者から分離してしまっているので，交換当事者のその後の行動が買手に確保された労働の成果に影響することはない。

共同体に組織されている社会的労働のあり方はこれとは異なる。そこには，何らか共同体的に管理され利用される土地をはじめとした生産手段にあわせて，共同体規制をも含めた意味で何らか共同体的な労働がある。目にみえる協業（直接的な）や，事実としての協業（共同体規制にあわせて，個々に，しかし同じ作業をする）やに加えて，他人のための労働が社会的分業と

して組織されるときにも，そこには，村に属する鍛冶屋とか神職とか，あるいは結（ゆい）の形をとった労働の交換とかがあるのであって，共同体という組織の中で，固定的な職分があったり，長い時間の経過の中で相互に提供し交換しあう生きた労働があったりしているわけである。そこでは他人のための労働の相互提供があったとしても，特別に物の形をとって労働力支出者の支配をはなれうるようになっていなければならぬ必然性はない。労働力の支出以前にすでに関係は確定している。

共同体の形での社会に対して，商品交換によってつくり出されてくる社会は，その拡大可能性において優れていた。なにしろ，具体的な交換の場としての市場（市）さえ安全に保たれれば，その市場で結ばれた人々，およびその人々のすむ全領域，つまりその範囲の土地と労働力とが，おのずと一つの社会へと生成するからである。

商品社会というものが，そのような商品交換によって組織化されているとすれば，そして商品という概念は，とりわけそのような商品交換の中からこそ，それの要素として抽象されてきたものであり，商品交換の全体を概念的に再構成するための基礎範疇であるとするならば，端緒範疇としての商品が物的なものでなければならないことは明らかである。そこにおかれるのは，外的対象物の姿をもった，一つの物としての商品なのである。であるからこそ，そこから，第三節での分析が示したような，商品価値が金という貨幣商品の姿をとらざるをえぬ必然性も示されるし，さらには，なぜ人と人との社会関係が商品という物と物との関係をとらざるを得ないか，という第四節の課題そのものが発生するのである。

商品を，さしあたり，とりあえず，一つの外的対象物，一つの物，として把える立場は，決して，意識の外に，意識から独立した物質の存在をみとめる，という哲学的な立場から直接に流れ出るものではない。その哲学的立場に即していることは，人間は土地という大きな自然を労働対象として持つことによってのみ生きている，という理解や，人間自身も大きな自然の一部であるからこそ，その共通性の基盤の上に労働対象への働きかけも可能なのだ，という理解であって，決して，商品が一つの物としてあるということではない。物としての商品は，人間の意識の外に，人間から独立して存在しているどころではないのであって，人間の労働によって人間社会の内部につくり出されてきたものであり，人間の目的意識的活動の産物なのである。生きた社会を形づくっている，要素としての生産者の活動がここにあるのである。問題はひたすら，その活動の特殊商品経済社会的あり方なのである。

労働の凝固物としての商品価値ということをスコットランド風に理解しないでほしいといったマルクスの言葉は，おそらくこうしたことどもに関係がある。商品は明らかに一つの外的対象物であり，一つの物なのだけれども，そして，交換価値は，使用価値とともにその外的対象物の一つの属性なのだけれども（なぜかといって，交換価値は，少くとも使用価値としての商品自体に担われていて，その物によってしか実現しないのだから，つまり，市場にその物をもってゆかなければ他のものを得られないのだから），しかし，それはまた幻のような対象性で，その物を個別にいくら吟味してみても，使用価値としてのからだ以外はつかめないのであった。商品価値は，価値方程式ともいわれる二商品の交換価値（つまり一つの関係）の中でしか，本当の姿をあらわしはしなかったのである。つまり商品価値はまさしく社会的規定性，関係規定性なのであった。

この認識に到達した時点で，だから物としての商品価値は人間の生理的エネルギーの凝固した実体的なものだ，とみるのは先祖返りであるし，だから関係だけが問題で物的形態は捨象しうる，とするのもスタート地点の意味を忘却する軽はずみである。前者についてみれば，人

間の外に人間の生理的エネルギーの凝固としてある，ということを個別的にみるのみであれば，何らかの具体的有用労働の成果であるということと，抽象的人間労働の凝固であるということとを，区別しなくてはならぬ現実的に論理的な必然性など消えてしまうのである。われわれがピラミッドや法隆寺をながめて，それが人間労働の凝固だとふと気がついたとしても，その発見は商品経済の独自性の研究には直結しない。後者についてみれば，前者のような理解に反撥するあまり，分析対象の特殊社会的独自性を失念してしまうということではあるまいか。人間の社会関係は，たとえ物と物との関係といった仮象的幻影を生み出さない場合であっても，結局は社会的人間たちの活動の組織としてあるのであって，その活動は自然との関係のあり方を内包しないではありえない。

物神崇拝または社会的な労働諸規定の対象的仮象ということと，社会的な労働諸規定のとる対象的諸形態ということはちがうのである。前者の幻想をやぶったところで後者はのこる。市場にあつまった交換当事者たちが，それぞれ相手方のもとにある物的商品の奥に社会的労働の支出を見抜いたところで，それぞれの人間から切り離された労働の成果，過去の労働，を交換し支配しあうことでしか結びつきえぬ関係が，当事者間の現実であれば，労働の社会的性格はかかる物的形態をもってしか社会的現象形態をとりえぬのである。共同幻想とこれの廃棄という言葉からは，そうした仮象・幻想をたえず生み出す根拠としての現実的諸関係や，そうした幻想を生まぬ別の現実的諸関係やは如何，という問題が感じとれない。

『資本論』第1章の第1節から第4節までは，下向，下向，上向，上向といういみでちがいはあっても，いずれにしろ分析的である。関心は商品の二要因のうちの交換価値の側にあつまっている。第1節における使用価値は価値の担い手であるにとどまり，第3節における使用価値は等価形態つまり鏡あるいは分銅の役割をはたすにとどまる。商品の現実は使用価値と価値の統一であり，かつは尨大な商品の生きた集成である。この現実へ，統体 Totalität としての全体へひとまず戻ってみせるのが，第2章『交換過程』である。この第2章の意義については，わたくしは見田石介氏に教えられた理解を維持している（見田石介，『価値および生産価格の研究』新日本出版，1972年，18頁および47頁）。

念のためにいえば，ここでも，『交換過程』と題されているからといって，商品生産が忘れられているわけではない。商品世界の中心部において，商品生産と商品交換とは相互に前提しあっており，不可分である。交換をあてにして生産はおこなわれているのであり，そうした生産の成果としての生産物の存在があってはじめて交換は社会を規定しえているのである。

個々の商品は，そうした生きた総体としての商品集成の中にあるものとして，個々の商品なのである。商品世界のうちにある生活者たちは，自分の手中にある商品にこそ，またそこにのみ，他の商品を請求する力がひそんでいることを感じており，その意味で商品は物として対象的存在としてあり，かくて感性的存在なのである。このことは，分析するものにとって所与である。ところが，ひとたび個々の商品を商品世界から抜きとってためしつすかしつしてみても，その物が商品たるゆえんは把握できない。分析は商品を商品たらしめている商品価値が社会的なものであることを明らかにするのである。商品は，感性的であり，しかも感性的でない存在である。さしあたりの感性的なものを信じこむことは物神崇拝であるが，商品を机上において只の財と化さしめ，商品世界での生活者としての経験的感覚を忘却するようでは，これはもうスミス以前，いやアリストテレス以前であって，貨幣もまた商品の一つであることから確認しなおさなくてはならぬということにならぬか。